
殺人者のたわごと、そして微笑 その2

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者のたわごと、そして微笑 その2

【Nコード】

N4255J

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

資産家を狙った連続殺人事件が起こった。

しがないライター清田は、事件を調べることになったが、偶然の出会いが彼自身の運命をも揺さぶるうとしていた。

清田は犯人を突き止めることができるのか、？

作：青木弘樹

数日が過ぎた。

清田は今日は、風俗嬢に取材に行く予定がある。

それはなんと先に書いたリンという女性だった。本名は鎌倉愛梨。もちろん顔出しはNG。

店側から依頼され、アダルト雑誌に広告を載せると共にイチオシの子を紹介するのだ。当然、店側が宣伝費を出しているので、清田は褒めちぎる文章を書かないといけない。例え褒めるところがなくてもだ。

今まで取材した中で、ひどい店もあったが、スポンサーは神様と
いうことで、決してけなすようなことは書けないのはもちろん、嫌
そうな素振りもしてはいけない。

大人の社会は嘘と建前の社会。いや、子供の社会もいまやそうか
もしれないな。

誰かが言った。

『嘘は嫌いだが、真実はもっと嫌いだ』

だから人の世に平和がないのかな？まあ、なんでもいい。とにかく
取材だ。

いわゆるソーランド店の取材。清田はひとりで来ていた。雑誌
編集者側は出来るだけ人件費を抑えたいのだ。

店員に案内され、まずは店長室で店長を取材。ガタイのいい店長
だ。その筋の人かもしれないな。

しかし店長は気さくな人だった。まあ、そういう人ほど怒らせる
と恐いのだが。

そして次に泡姫リンさんの取材。コトが行われる部屋で二人きり
の取材だった。

「はじめまして。リンです」

「！、、、」

清田は驚いた。かなり美人だ。スタイルもいい。しかし、これはあくまでも取材。清田は冷静を装った。

「ど、どうも」

清田はあいさつをし、ペンとメモを取り出した。

「よろしく」

リンはかわいく微笑んだ。清田は一瞬、生唾を飲んだ。リンの服装はキャミソール一枚のみ。清田はうれしいやらもつたいないやら混乱していた。

そしてこう考えた。ここで変な事をしたら、あのいかつい店長にボコボコにされる。そう自分に言い聞かせた。実際、そうなる気がするが。

「では、よろしくお願いします」

「うん、よろしく」

「この仕事を始めたきっかけは？」

「そうね、興味があつたからかな」

「どれくらい出勤していますか？」

「週二回くらいかな」

「少ないですね。他に仕事をされているとか？」

「ふふふ、それは秘密」

「今までにいた、変わったお客さんとかは？」

「そうねえ、いろいろいるけど、、そうそう、剣道着を持ってきて、これを着てくれって人がいたわね」

「剣道着ですか？まさかお面とかも？」

「それはさすがになかったわ。中に着る服だけね。たぶんどこかで道場やってるんじゃないかなあ」

「普段、女生徒を変な目で見てるかもしれないね」

「ねっ」

その後も取材は続いた。清田もだんだん落ち着いてきて、いろん

な裏話を聞けるので興味深かった。ただし店の評判を悪くするようなものは雑誌には載せられないが。

そして間もなくして、取材も終わった。

「では、このあたりで終わりにしたいと思います。ありがとうございます」

「そう。お疲れさま。よかったら今度遊びに来てね」

「はい。僕みたいな年寄りでよかったら」

「あら、年齢より若いわよ。それに年上は大好きなの」

「ありがとう」

清田は部屋を出た。

「おつかれさまです。どうです？リンちゃん。美人でしょ？」

店長が迎えた。

「そうですね。ちょっとびっくりしました」

「週二回しか入ってないんですがね。残念です。看護師なんてやめればいいのに」

「看護師？」

「あ、しまった。つい、、、。清田さん、今の話は聞かなかったことにしてください」

「ええ、分かりました」

（看護師か、、、）

「それでは原稿を書き上げたらまたお持ちします。それで削除してほしい部分があれば、お伝えください。また、こういうことを書いてほしいという部分があれば、お教えください」

「オッケーです。よろしく願います」

「では、僕はこれで失礼します」

清田は帰ろうとした。しかし、

「清田さん」

「はい？」

「もしよかったら、リンちゃんまで遊んでゆかれませんか？」

「えっ？いや、、、。あいにく今日は持ち合わせがありません」

、
、
」

「いくらありますか？」

「えっと、、、」

清田は財布を見た。

「えっと、、、七千円しかないですね」

「そうですか、、、」

「すみません」

「分かりました。うちは一時間二万円なのですが、清田さんは特別七千円でいいですよ、今日だけね」

「えっ？ほんとですか？」

「ええ。体験レポートも兼ねてください」

「どうしようかな、、、」

「きつと満足しますよ」

清田は迷ったが、これはチャンスだ。あんな美人はそうはいない。

「じゃ、じゃあ、お願いします」

「そうこなくっちゃ」

「、、、」

「ではこちらへ、、、」

清田は待合室へと通された。

清田は少しそわそわしていた。数分して店員がやってきた。

「お待たせしました。ではあちらのエレベーターへどうぞ」

「はい」

清田がエレベーターに向かうと、中にはリンがいた。

「あら、さっきの、、、」

「ど、どうも、、、」

「うれしい。私のこと気に入ってくれたんだ」

「そ、そりゃあ美人だしね」

「ふふふ、ありがと」

微笑むリン。清田も微笑んだ。

エレベーターは三階で止まり、二人は部屋に入った。さっき取材

した一階の部屋よりきれいな部屋だ。リンが優遇されているのか、清田が優遇されているのか。まあそれはどっちでもいい。どっちにしても欲望が絡む部屋であることに違いはない。

「さて、なにか飲みます？」

「えっ？じゃ、じゃあお茶を」

「はい」

リンは冷蔵庫からペットボトルのお茶を二本取り出した。

「はい」

「ありがとう」

二人はお茶を一口飲んだ。

「じゃあ、お風呂入れるね」

「うん」

リンは浴槽にお湯を入れ始めた。

「そうだ。名前聞いてなかったね」

「あつ、清田です」

「よろしく、清田さん」

「よ、よろしく」

清田はドキドキしていた。リンは美人で、しかも仕草がかわいらしい。まさに理想の女性だ。もちろん仕事上でのテクニックでもあると思うが。

「じゃあ、とりあえずシャワーいきましょ」

「う、うん」

清田は服を脱ぎだした。リンも着ていたキャミソールを脱いだ。

「、、、」

清田はさらにドキドキしだした。下着姿のリン。肌もきれいでスタイルもいい。

「清田さん、おいくつなの？」

「えっ？43だけど、、」

「ふうん、、お腹出てないのね。30代の人みたい」

「そ、そうかな？けど体力は駄目だ。運動不足ってのもあるけど」

「私もそう。運動は全然してないなあ」

「け、けど、リンさんはスタイル抜群じゃない」

「そんなことないですよー」

リンはそう言うのとゆっくり清田に抱きついた。

「、、、、」

清田は興奮していた。やわらかい体、いい匂い。このまま押し倒したい気分だった。

清田はリンと抱き合ったまま、そっとリンのブラジャーのホックに手をかけた。

「、、、、」

リンは黙っていた。清田はブラジャーをそっと外した。きれいな乳房が現れた。

「恥ずかしいわ、清田さん、、」

この仕草が本音であれ、テクニクであれ、もうそれはどうでもよかった。清田は理性など放り投げ、リンにキスをした。

絡み合う二人。初対面の男女が、密室で絡み合うという世界。それは果たして正常か異常か。

「じゃあ、シャワーいきましょ」

「うん」

リンはパンツを脱いだ。清田はすでに全裸だ。二人はバスルームに向かった。

リンは清田の体を丁寧に洗った。もちろん大事な部分も。

「さっ、どうぞ」

体を洗い流し、リンは浴槽を示した。清田は浴槽に入った。

「ふう。いい湯加減だ」

「よかった」

リンも自らの体を洗い、浴槽に入った。

浴槽で寄り添う二人。ちょうどリンを後ろから抱きしめるような体制だった。

「あったかいわ、清田さん」

「そうだね」

しばらく温まった後、二人は浴槽から出た。

バスタオルで体を拭き、ベッドに向かう二人。

「清田さん、少し暗くしていい？」

「うん、いいよ」

薄暗くなる部屋。清田は仰向けに寝ている。リンは髪をくくり、清田に近づいてきた。

そして二人は、甘い時間をすごす。少なくとも清田にとっては夢のような時間。

一応、取材の一環とはいえ、清田は幸せだった。たとえその場限りの愛情だとしても、。、。

そして、その夜。

原稿を書き終えた清田は、早々と寝ていた。しかしその頃、。、。
「ぐわあああ！」

ある場所で、四件目の資産家殺人が行われていた。

「、、、」

犯人は包丁を手に、死体を見ていた。

犯人は少しだけ家の中を物色した。そして金目のものを少しだけ奪い、逃走した。

翌日。またもやテレビはこの事件を大々的に放送した。

「また、事件が起きてしまいましたね」

「いったいいつまで続くんでしょうね」

「犯人の手がかりは何かないのでしょうか？」

「はい。今のところほとんどないようですね」

「指紋なども一切なし？」

「はい。犯人は常に手袋をしているようですからね。監視カメラがある家の映像から、おそらく男だろうという推測はされているようですが、帽子にサングラス、マスクまでつけているため、年齢も分

からず、顔の特徴も一切わからないそうです」

「なるほど、」

いつものように語り合う司会者やコメンテーターたち。みな神妙な面持ちだが、内心はどうだか、。せいぜい自分が狙われないことを祈ってるんじゃないのかい？

「CMのあとは、お天気です」

清田は寝ていた。昼過ぎまで寝ていた。目を覚ました清田は原稿を再チェックし、軽く飯を食べ、出かける準備をしていた。原稿を取材した風俗店に持っていくのだ。

とりあえず簡単に身なりを整え、清田は風俗店に向かった。

数十分後。

清田は風俗店に着いた。店員に案内され店長室にいき、店長に原稿を見てもらった。

「、、、」

「どうでしょうか？」

「うん。いいですね。問題ないですよ」

「ありがとうございます」

「ところで、リンちゃん、どうでしたか？」

「え？ええ、よかったですよ」

「やっぱり。人気ありますからねえ」

「ええ。わかります」

「もしよかったら、また来てくださいよ。指名料くらいならサービスしますよ」

「ありがとうございます」

「ただ、人気あるんで、予約取れないかもしれませんかね」

「ですね。わかります。ほんとに美人ですしね」

「それじゃあ、よろしく願います」

店長は、なんとなく清田が気に入ったみたいだった。

清田は店を出た。そしてその足で風俗雑誌の編集社に向かった。

そしてギャラをもらい、すこし世間話をした後、家に帰っていった。

夕方。清田はコーヒーを飲みながら、漫画を読んでいた。

子供の頃、夢中になって読んだ漫画を、最近また集めてみたのだ。懐古主義なんかじゃない。新しいものになじめないわけでもない。昔のもののほうが優れているというわけでもない。

人はある程度歳をとると、自然とそうなる。たぶん新しいものをいちいち受け入れるのが面倒くさくなるからだろう。

しばらくして晩ご飯を食べた清田はうたた寝していた。

2、3時間寝たのだろうか、目を覚ました清田はパソコンを開いてみた。

「ん？」

メールが来ている。

「誰だろう？下さんかな？」

清田はメール開いてみた。すると、

” こんばんは。資産家連続殺人事件のことで情報があります。明日の午後2時、北オリオンビルの下でお待ちしております。情報提供料はその時交渉しましょう”

「、、、、！？」

差出人は匿名だった。

清田は一応自分のホームページを持っていて、資産家連続殺人事件についての情報を求めている。しかし情報はまったくなく、これが初めての情報だった。

「北オリオンビルか、、、、」

清田はつぶやいた。

「まあ、とりあえず行くしかないな」

と言いつつも、清田は内心、少し楽しそうだった。

その3へ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4255j/>

殺人者のたわごと、そして微笑 その2

2010年10月8日15時13分発行